

さ ざ ん か

第64号、2007年2月

寒い日が続いております。みなさま、お風邪などお引きにならないようにお気をつけなさいませ。うーん。日本語は難しい。みなさん、風邪を引かないように気をつけましょう。くらいでいいのでしょうか。

さて、今年は暖冬とかで例年より降雪が少ないようですが、雪が降らなくても、寒暖計が零下をしめす寒い日には伊佐平野は霜で田んぼは一面真っ白になります。とても美しい朝の光景です。天からの雪の結晶の贈りものがなくても、地と気の恵みがこの寒冷の里に素晴らしい朝景色をもたらしてくれています。なんと素敵な土地に住んでいることでしょう。

受験の季節です。受験生が家族に居る方には、雪が降ろうが、霜が降りようが、そんなことはどうでもいいから、とにもかくにもうまくわが子に受験を乗り切って欲しいという気持ちでいっぱいだと思います。家族としては当然です。ただ、受験も人生にとってはただの一つの通過点に過ぎないのでから、うまくいったときは驕らないように、残念ながらうまくいかなかったときは、気落ちせず捲土重来を期するようにアドバイスするのもまた年長者の義務かもしれませんね。

ああ、受験をしたころの若い自分がなつかしい。あの時もっと勉強してれば、などといまさら言っても詮無いこと。受験生諸君！受験なんて、命をかけるほどのものではないけど、命懸けで頑張れ！と矛盾したエールを送りましょう。それにしても、大学に入ったら思いっきりバイトをして、思い切り遊ぶぞ！という決意はどこか間違ってますか。

お知らせ

- * 骨密度、測ってみられましたか？ご希望の方はいつでもできますので、各科窓口でお尋ねください。骨粗しょう症の進行を予防できることがあります。
- * MRI で脳の検査をしてみませんか？目的は脳卒中やボケ（認知症）の予防につながることもあるからです。脳神経外科または神経内科外来にてご相談ください。

11月も終わりのある朝、嘗ての同僚 M さんから電話。「今日のご在宅ですか。是非会いたいと言う人が居て。S さん、覚えていらっしゃるでしょうか。」と言う。「S さん？あの R ちゃんのこと」と言う私に、「そうです。そうです」と言う返事があって、午後から連れて行くと言う。

その頃、准看護学校を卒業したばかりで、身体も比較的小さく、ころころとして可愛かった彼女は、姓よりも通常 R ちゃんと言う名前と呼ばれる事のほうが多かった上に、私には忘れられない名前でもあった。

当時の看護婦宿舎は、八畳一間に四人が定員であったが、二十歳前後の看護婦ばかりの中で、三十半ばのおばさんは煙たがられたのか、私の部屋だけは病棟婦長の二人だけ。ところが、相部屋の住人が持病持ちで時々発作が出る。それも夜が多いから、医師の許に走らねばならぬ。足の不自由な私に配慮した事務長が、この二人部屋へ中途採用の S さんを送り込んだというわけである。事務長は是で夜半の意思呼びの労務が軽減する筈と言われる。なるほど管理者と言うものは、深慮遠謀かと感心して引き下がった。

ところがである。彼女にしてみれば眼の上にタンコブが二つくっついている様なもので、頗る居心地が悪かったに違いない。若い者は若い者同士忽ち盟友が出来て、その子の部屋に入り浸り毎夜泊まりに出かけて、おばさん二人の我が部屋で、枕を並べた記憶が殆ど無い。R ちゃんを鮮明に覚えている訳である。

その R ちゃんがやって来た。もう六十歳になると言う。中学時代の同窓会があって、幾十年ぶりの帰郷だとの事、故郷といっても両親に早く死に別れ、近しい血縁もない彼女の面倒を、一手に引き受けているのが、幼友達の面々である。弁当をいつも渡して下さっていた今は亡い恩師の事、お墓を訪ねて行った事、優しかった友達の事、そして楽しかった北薩病院での数々のこと、夜毎逃避行を重ねたことに及んで、昔語りは終わりとなった。

今は上方の老人福祉施設で勤めていると言うが、職場の話になると堰を切ったように、滔滔と看護婦論を展開するいっばしの看護管理者の R ちゃんが居た。幼顔残る彼女を見ながら過ぎ去った時の長さと、成長の軌跡をしみじみと感ずることであった。

老いて我が身を乗り越えてゆく若者に逢う幸せを、送ってくれた昆布茶を戴きながら、反芻している昨今である。

復活の日は遠い カラーマン (とその女)

ミラクルを目指して日夜努力しているカラーマンは、このさい、男女同権うんぬんはやめて、つまりカラーパーソンなどつまらない小手先の修飾で女に媚びるのはやめて、男は堂々と男らしくカラーマンと名乗ることにした。お、女がなんだ。男女共同参画社会がなんだ！（なぜ、男らしさに目覚めたのか、それは秘密である）

《カラーマンって名前を変えたからって、別に男らしくもなんともないわよ。そういうつまらないことにこだわって、ばっかみたいね。弱い犬ほど吠えるのよ！》

さ、さて、最近のカラーマンの日常の生活を少し語ってみることにしたい。

《べつに、あなたの語りなんか聞きたくもないけど、まあ、いいわよ。あたしもヒマだから聞いてあげるわよ。どうぞ語りなさいな。おとこらしくね。ふふ。》

毎日、首吊り（頸椎牽引）をしているカラーマンであるが、ある日のこと、いつものように朝 7 時半に、リハビリ室に出向いた。いつものように、あごの下に牽引のベルトを据え（マジックテープで止める）、牽引の機械のスタートボタンを押した。椅子に腰掛けて、背筋を伸ばした状態で、20 キロの牽引力で垂直にクレーンで引き上げるように首を牽引するのが決まりきったパターンである。20 キロで引っ張ったあと、その位置でしばらくとどまり、それから牽引を中断し、元の位置に戻る。そしてまた牽引を開始する、というサイクルが 15 分間続くのである。

ググッと機械は機械的に（機械だから当たり前か）私の首を吊り上げようとする。おっ、今朝は何か引っ張る速度が速いなあ、などと思っているうちにいつもの停止位置で止まるかと思いきや、そのまま機械は無慈悲に牽引を続けるではないか。《機械が無慈悲ってことはないのじゃない？ここもやはり機械的になって表現すべきだわ》。（そ、そんなことはどうでもよろしい。）おお、首が、首が持ち上げられっぱなしである。く、くるしい！パニックになりかけたが、そこは冷静なカラーマン、あたふたしながらも中腰になり、ひっくり返りそうになりながらもあごの下のベルトのマジックテープを必死ではずした。《なーにが、冷静かしら？相当びびってるじゃないの。あたふたとか、必死とかいってるじゃない？つまらない意地を張るところも、ふん、おとこらしいこと！》

おう。なんとか助かったぞ。危うく、本当に首吊りをしそうになってしまった。このまま、不幸にもベルトをはずしそになったら、「早朝リハビリ室殺人事件」、もしくは「カラーマン、世をはかなんで、寂しく早朝のリハビリ室で自殺」などと、「さざんか」の記事にでもなるところであった。とにかく、自殺もしくは殺人事件を逃れたカラーマンは冷静に機械の設定を見てみた。な、なんと牽引の設定が 109 キロ、となっ

ていたのだ。109 キロだ。この牽引の機械の最大値である。少なくともどういう事態が起こったのかは即座に理解した。(それは、誰でもわかるわよ。20 キロのところから109 キロになっていたってことでしょう。そういうことは理解とは言わないのよ。おばかさん。)

しかし、いったいなぜ、いつもの20 キロが109 キロになっていたのだろうか。《それを理解しなさいよ!》もちろん、牽引の機械はカラーマン専用ではなく、他の患者さんも使用することがあるから、いつも20 キロでなくても不思議ではないのだが、それにしても109 キロとは! 使用しているのは、とてつもなく強靱な頸椎の持ち主か《そんな人いるわけないでしょう!》、あるいはろくろ首の女か。《あほ。ばか、まぬけ!》
もしくはカラーマンの日常行動を知っていた人物による計画的殺人事件なのか。《それはあるかもねえ。あちこちで失言だらけだもね、あなたは。》

と、とにかく、何とか命を取りとめたカラーマンはとりあえず気を取り直し、いつも通りに、ミラクルを信じて大量の内服薬と頸椎牽引の日常を続けることにした。頸部脊柱管狭窄症が治癒するというミラクルは未だおとずれないが、それでも希望を持って日々首を吊ることにした。《まあ、こんなときは、優柔不断っていうか、あきらめの悪い男で良かったわね。いつまでも、いつまでもお続けなさいな》

とまあ、ある日こういうことがありました。多分、掃除のときに誰かが機械のダイヤルを間違っただけで一番端まで動かしてしまったのだらうという結論になっております。世の中って想定外のことで本当によく起こるものですね。《なにいつてるの? 自分の人生を振り返って御覧なさいよ。想定外ばかりだったでしょう? それで、人生なのよ!》

ま、まあ、何が人生かはまだ語るには早すぎますので、これにめげずに、とにかく小さいながらも希望を持って復活したカラーマンとして治療を続けることにします。《そうだわね。希望をもってこそ癒しや救済の時がくるのでしょうかからね。おとこらしく、頑張りなさいな! えせフェミニストさん》

品性下劣になった日本 貴島高則

「日本人は貧しい。しかし高貴だ。世界でただ一つどうしても生き残って欲しい民族をあげるとしたら、それは日本人だ」 これを書いたのはポール・クローデル。有名な詩人で駐日フランス大使でもあった人です。1955年に亡くなっていますが、もし存命であったら、私たち日本人はどの面をさげて会うことが出来るでしょうか。大使はあまりにも日本人を買い被りすぎです。

決して卑下するわけではありませんが、確かに日本人はいま、豊かになりました。しかし、高貴だとは口が裂けてもいえません。全国民が全部とはいいませんが、品性は下劣になりました。どうしても生き残って欲しい民族などといわれると、恥ずかしさで気が遠くなりそうです。敗戦直後のことです。日本人は食糧も欠乏し、飢えの中にありました。その時アメリカからララ物資が送られて来ました。

麦、砂糖、カンヅメなどの援助物質です。が、飢えているはずの日本人がそれらを奪い合わず分け合ったのです。当時のアメリカは日本人を好戦的で野蛮な民族だと思っていました。こんな予想外の日本人の行動を見てアメリカのマスコミ、ニューヨークタイムスカワシントンポストが紙面で日本人を称えたことがありました。あれから60年後の日本人はどうでしょう。株操作疑惑のライブドア事件、利潤追求のための倫理観の喪失、金があれば何でも買えるという拝金主義の横行は目に余るものがあります。

毎日の新聞、テレビ報道は心を暗くさせ、怒りを爆発させます。拝金主義によるモラル喪失のオンパレード。耐震強度偽装事件。ライブドア事件、大手ホテルチェーンの東横インの違法改造、防衛施設庁の官製談合事件などあってはならないことが大手を振ってまかり通っているのが実状です。これらの事件の共通点は倫理よりもモラルよりもお金が大切主義。ヤマハ発動機が禁輸製品であるはずの無人ヘリコプターを中国に売り渡したことも発覚しました。このヘリコプターは農業用の殺虫、殺菌用に開発されたものですが、使用方法を変えれば細菌散布化学兵器に転用出来るものだといえます。だからこそ、禁輸製品なのです。

私たちはこれらの事件に対してもっともっと怒るべきだと思います。数年前にウクライナ大統領選挙で現大統領が反対派から毒を飲まされ顔が変容する事件が起きました。この不正にウクライナ国民は怒りを表明、結果は現大統領が当選しました。ご記憶の方も多いと思います。バブル経済以前、日本でも“おしゃもじおばさん”たちがいて、おしゃもじをかつて国会に押しかけました。強い意志表示です。日本人の大人しい性格に加え、今日が無事で暮らせればいいや、といった利己主義が不正への感覚を麻痺させています。アジるわけではありませんが、おしゃもじおばさん・おじさんが日本人への警鐘を鳴らしてデモをやるべきだと思います。

俳句

西屋敷 喜美子

凍雲や 壊れたままの 精米機

三寒や 続く三寒 伊佐盆地

魅力的な笑いは幸福のもと

宮園辰夫

若い女性は笑えばシワが増えるという。それは迷信だ。笑うというのは顔の筋肉を動かして、よく使うわけだから、かえってシワにならないんだ。笑いは若さを保つ秘訣でもあるんだ。本当にシワが増えるのは、しかめっつらなんだ。眉間にシワを寄せてしかめっつらばかりしていると顔の相も悪くなるしシワもてきめんに増えてくる。

女の人が笑ってはいけないというのは、封建時代の名残だ。女は無口で、男の後にいなさいなんて思想が支配していたので、笑わない方がいいみたいになってしまった。奈良時代や平安時代の女は笑いを美としていた。手紙なんかどんどん書いて、恋文なんかも女のほうでどんどんしていた。しかし、最近感じることはいい笑い方をする若い女の人がいなくなったということだ。ケラケラ馬鹿笑いはするけど、魅力的な笑い方をする人が少ない。

年寄りの方が、余程魅力的な笑い方をする人が多い。笑うということは、身体にもいいし、福も来る。嘘ではない。脳科学の大権威の先生の折り紙つきである。笑うと体から何かフェルミンというホルモンが分泌される。これが快ホルモンってやつで、精神的にバランスがとれた状態になるんだそう。逆にイヤなことがあると不快ホルモンが分泌される。快と不快のバランスがとれていないと、ノイローゼになったり、屋上から飛び降りたりするようになる。人間が一番美しい顔は笑った顔だそうです。私はよくわかりませんが、ある本で読んだことを思い出します。

笑いの効用は学問的にもすべて健康と幸福のものかも知れません。だから笑いは世界を平和にすると言うもので、人間だけが持っている特性だから、大いにチャーミングに笑うようにしませう。

冬木立

病室の小さき窓の冬木立すがしきまでに夕映えてをり

焼芋も減食強いられし芋一つ4人で分けあひて食う

さつま狂句

キンカン

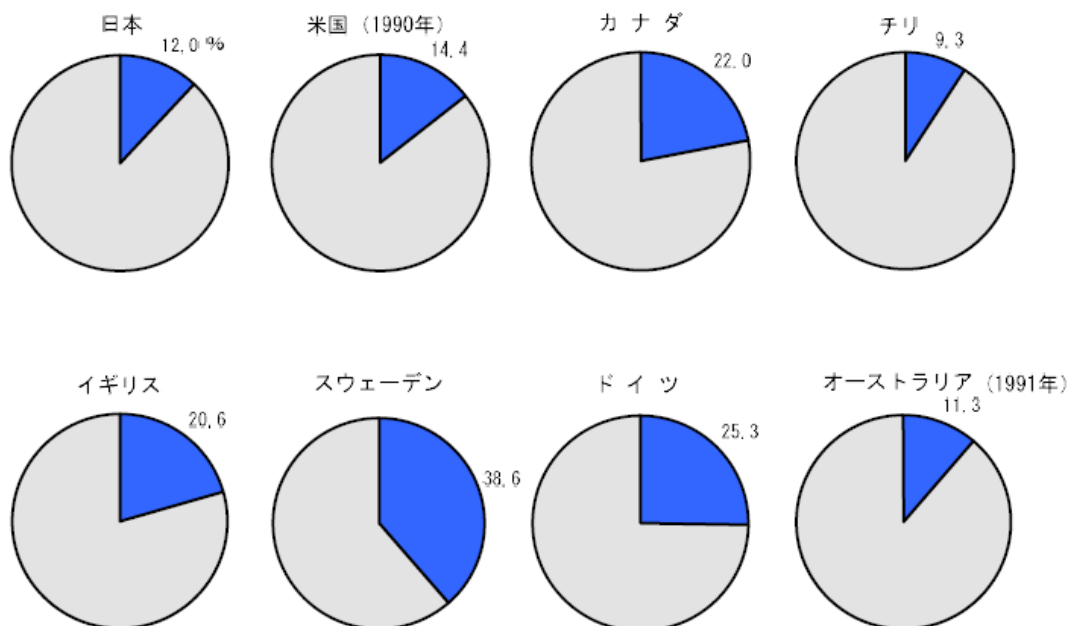
医者名利娘ん胸肌いっぺさわっ

こん度 良かろち二度目の面接

新シリーズ：資料から見る医療・福祉

厚生労働省のホームページからひろった資料です。ずいぶん古い資料しか載ってませんでした。それぞれの社会事情があるので、不確かなことしかいえませんが、少なくとも日本の社会保障は世界に誇れるものではない、ことだけは確かなようです。

3 国内総生産に対する社会保障給付費の割合（1993年）



編集後記

最近、実に久しぶりに古典を読みました。トーマス・マン「魔の山」、ゲーテ「ファウスト」など。読後感。科学技術は彼の作者の時代から比べると飛躍的に進歩しているが、人間そのものは進歩しないものだ、というか、むしろ退化しているのではないかと改めて思いました。しかし、それもまた人間の人間たるゆえんでもあるのでしょうか

気まぐれに統計シリーズをはじめました。主観でなく、客観的な統計を前に皆さんと共に日本の医療について考えてみたいと思います。(K.T)